

「た」
藤原上102 日本聖皇457
万199 悲壮云1867
4.25^P 1/2

4.25^P 1/2

500分の1

けい 601
峯谷 568

からばり 市
相原 市
高井田

市町村等
127
たひと (たひと) 20
" 元 36人

田山^{たやま}の死^しれ^る人^{ひと}を見^みて、悲^{かな}傷^{いた}ひて作^{つく}りま^しし

万葉集^{マンヤシウ}の卷^{マキ}三^{さん}一^{いち}四^し一^{いち}五^ごに、

上^{うへ}宮^{みや}聖^{せい}徳^{とく}皇^{こう}子^し、竹^{たけ}原^{はら}井^いに

出^い遊^{でま}し、時^{とき}、龍^{りゅう}

太子^{たいし}は、斑^{いかに}鳩^{かの}宮^{みや}を後^{あと}に

し、難^{なん}波^はの竹^{たけ}原^{はら}井^い

大阪府^{おさかふ}中^{なかつ}河^か内^{うち}郡^{ぐん}相^さ原^{はら}町^{まち}高^{たか}井^い田^だ

の方^{ほう}へと出^いて

な^なおぐ^ぐ高^{たか}井^い田^だは、奈^な良^ら盆^{ぼん}地^ち西^{せい}端^{たん}の

龍^{りゅう}

田^たの南^{みなみ}側^{がわ}を西^{せい}流^{りゅう}す大^{やまと}和^わ川^{がわ}か

金^{かね}峯^の峡^{きょう}谷^{きやう}

を抜^ぬけて、難^{なん}波^はの平^{ひら}野^や郎^{らう}へ出^いる直^{ちき}前^{ぜん}の北^{きた}岸^{がん}に

置^おいてい^る。

斑^{いかに}鳩^{かの}宮^{みや}の西^{せい}方^{ほう}の

龍^{りゅう}田^だあた^りや

つきた時^{とき}太子^{たいし}は、

左^{ひだり}かも知^しれな^いい

太子^{たいし}は

死^しんで横^{よこ}たわ^つてい^る旅^{たび}人^{ひと}ら

い^い人^{ひと}

を御^ご覧^{らん}にな^り、悲^{かな}しん^で、一^{ひと}つ^の歌^{うた}を

お作^{つく}り

にな^つた。

あ^ある^るい^いは

聖^{せい}徳^{とく}太^{たい}子^しが

苦^く悩^{なう}の

日^ひ々^びを

過^すぎ

て

お^おう^うれ^れた頃^{ころ}の

こ^こと

で

あ^あつ^つた

う^うか。

太^{たい}子^しは、

斑^{いかに}鳩^{かの}宮^{みや}を

後^{あと}に

し、

難^{なん}波^はの

竹^{たけ}原^{はら}井^い

旅^{たび}人^{ひと}

4/33^P 1/2

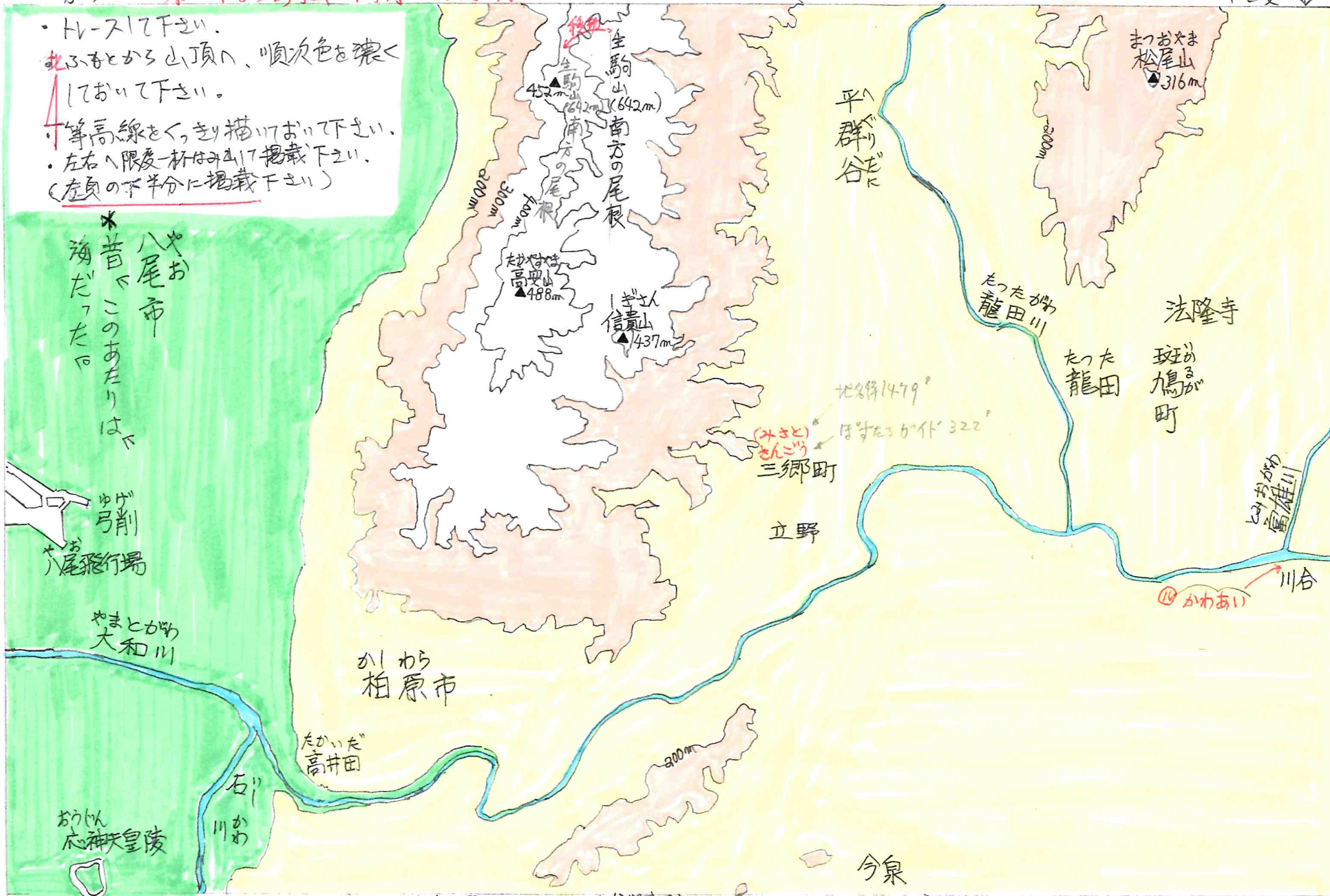
・カラー 第○図生駒山と同様に作図をお願いします。

4,125^P-2/2

枠不要

④4125^P-3/2
④4708^P-1/3
生駒山(近畿)
④4086^P-3/1

- ・トースト下さい。
- ・北ふもとから山頂へ、順次色を濃くしておいて下さい。
- ・等高線をくっきり描いておいて下さい。
- ・左右へ限度一杯はみ出して掲載下さい。
- (左頁の下半分に掲載下さい)



※昔々このあたりは海だった。

ゆが弓削
や尾飛行場

やまとかわ
大和川

おうじん
天皇家陵

かから
柏原市

たかいた
高井田

立野

今泉

法隆寺

斑鳩町

しおかわ
富雄川

④5041^P-3/2

1226

1426 第467図 高安山・法隆寺近傍図

※昭和42年7月30日付、国土地理院発行の5万分の1地図「大阪東南部」参照
高安山の座標は、④4708^P-2/4

④4541^P-3/2 高安山

865

④4940^P-2/4

同図④4103^P-3/4 ④4086^P-3/1 生駒山

④4126^P-3/3
④5037^P-3/3 三郷町
④4086^P-3/1 生駒山

865^P

仮定1707年
④4129^{P-3/3}

藤原上102°
時業異77^P, 457^P

④4132^{P-3/2} (28)
/ 遊覧④4136^{P-3/3} 4,126^{P-3/3}

三好ちゆ
胸の中
④4116^{P-4/4}

云 2131^P みまかる
畢行記に、兄とのこにあるのか不明
「病に臥してみまかりぬ」とある
という

とないえ 実には
龍田山南麓 斑鳩宮の太子御自身のこと
を重ね合わせ、悲しくも歌にされたのではなからう
か ✓
と想察される。

米

あえて述べると、それは、推古二十

一年（六一三）十一月、十二月頃のことであ

ったかも知れない。（「聖徳太子伝暦」推古二十

十一年十一月条。推古紀二十一年十二月一

日条へ片岡山遊行条。日本霊異記上巻

第四話へ聖徳皇太子、異しき表を示す縁等

参照）
定かでないが、この物語では仮

りに、次のような経緯を考えてみたいで

●太子は、推古二十一年（六一三）十一月半

「十一月十五日」次頁14頁

新 小林504 山西ニ上山の麓の裏か? 紀下198P
4129 柱 かり 小村655 藤原上102P
4129 11月 4126P-3/3

4161P 4126P 4125 末2行
12月10日 12月10日 4128P 布 4126P 同明615年前 4125P 末2行

はころ、龍田山南麓の斑鳩宮を出入れ、
難波の竹原井へ大阪府中河内郡柏原町高井
田の方へと出遊され、
そのすぐ南の日科長陵(用明上皇、およ
ひ聖徳太子の爲に作り始めた陵)を訪ね、
翌月の十二月一日、斑鳩宮への歸りに、片
岡山(奈良県北葛城郡香芝町今泉。法隆寺の
南西約七キロ)へさしかかられた。
ちなみに述べると、聖徳太子伝暦に推古
二十一年十一月条に、こう記されてゐる。
推古二十一年冬十一月。太子奏作掖
上池。畝火池。和珥池。又自難波至京。始治
大道。ここに、同月十五日、その下へ曆録
日十二月、の各注文あり。太子命駕。巡看山
西科長山本墓處。還向之時。即日申時。枉道
入於片岡山邊道家。即有飢人臥道頭。云
とある。ようするに、
つまり、
(管理する)ニル

頃々 2行

4125 7行

小林 1061 街頭 路頭 という

元(皇)270^p 紀(原)版307^p
紀下160^p注11

小林^p 979^p 行(こ)ろ
4126-336

3575^p-3/3 紀下11 4.127^p-1/3

へ太子は、推古二十一年十一月から十二月

にかけての頃、^{12.5 OM}山の西の^{12.5 OM}科長山

本墓處^{12.5 OM}を訪ね、斑鳩宮の方へ還り向か

われ、片岡山へ到られた^{二上山の北または南の峠を越えて}

ことが分かる^{二上山の北または南の峠を越えて}

■なお、用明天皇の¹科長陵¹に¹つりて、

●用明記に、

「御陵在石寸^{13.5 OM}坂上^{13.5 OM}、後遷科長中陵也^{13.5 OM}」

長^{なか}の中の陵^{なかのみさぎ}(大阪府南河内郡太子町春日)に

遷^{うつ}しまつりき

と記さ¹れて¹いる。

●推古紀元年九月条には、

「改葬橘豊日天皇於河内磯長陵¹」

とある。

●しかし、推古元年に橘豊日天皇(用明天皇)

の陵を河内磯長陵に改葬した、とりうのは時

期的に早すぎるように思われる。(第六十九

章へ東宮の項において既述。巻末の「保寿表」参照

●もしかしたら、

へ用明上皇¹薨去¹後¹の御陵¹に¹始め肥後国(石

は

大阪府南河内郡
大阪府南河内郡
大阪府南河内郡

紀下204^P注6 4.127^P-2/3

紀下204^P

④4127^P-3/3

トV

61521
5931
2222

すに相当する所へに作られ、推古元年九月に
肥後国内の別の所へ河内磯長に相当する所へ
遷され、
大阪府南河内郡太子町春日に改めて築かれた
のであろうか、
と想像されるか、
いうまでもなく詳らかでない
また、聖徳太子の^{科長陵}科長陵口について、
推古紀二十九年二月是の月条に、
上宮太子を磯長陵に葬る
とあり、
延喜諸陵式に、
磯長墓 橘豊日天皇之皇太子 名云聖徳
在河内国石川郡。北城東西三町、南北二町。
宇戸三烟
とある。
いま、大阪府南河内郡太子町大字太子の磯
福寺境内に、
がある。丘陵の南傾斜地に営まれた円墳。高
さ約七、八米、径約五四米。諸記録によると、

「たてまつり」④4126-3/3

天のき改行

4.127^P-3/3

天のき改行

④4127^P-3/3

あつは、西の大徳園(肥後園)を望み
所に、科長陵を築かしたのだろうか?
H.9.1.24 ④ ④2471^P後佐の墓

④4209^P ④4211^P-3/3
記下は4^P本行
7/10巻971頁

南を向く義道と玄空は切石で構成されてお
玄空内に三棺有る。梅原末治氏は、奥は間人
皇后(太子の母)へ、前面東は太子、西はその
妃のものという。日本書紀(下)日本書紀
文学大系、岩波書店、二〇四頁注六参照)

*

すなわち(六一三)
山推古二十一年十一月当時、難波の竹原井
のすぐ南に、すなわち

(1) 用明上皇の科長陵(河内郡太子町春日)

(2) 聖徳太子の科長陵(河内郡太子町大字太子
を造り始めていたのであろう。

図より、竹原井および科長陵の方へ向かうた
め、龍田山南麓の斑鳩宮を出られた聖徳太子
は、龍田山の死せる人らに御覧になった。

と夜定してみたい。と思われ。

*

7/21 今朝 1-73 の 1行
10/4 4126 - 3/3

片岡山

推古紀二十一年（六一三）十二月一日条に、
 「^{いつぎのみこ}皇子太子、^{かたきか}片岡に遊行でます。時に飢者、^{とぎ}時に^{うゑるひと}飢るひととある。（追つて詳述）
 同十二月一日条の詳

[illegible]

志奈天留耶
 片岡山に飯に飢て臥せる旅
 人阿者兄祖无
 飢人挙頭所返歌
 斑鳩や富の緒川の絶はこそ我が大公(大

15493
④4132 P-3/3 1944

前17所「奈」

4.129^P-1/2

今昔①-73^P
こと

頭と揃える
こと。

君の御名を忘れぬ

といへり

とある。(「日本霊異記」日本古典文学大系

岩波書店、四五七頁注二九参照)

今昔物語集の巻第十一第一話にも、大同の

ことが記載されてゐる。

「太子馬より下て、此の飢人と談ひ給ふ紫

の御衣を脱て覆給て、歌を給ふ。

志太互留耶加太乎加耶末尔伊比尔宇

恵三布世留太比々度阿和連於耶那志

其時に、飢人頭を持上て、返歌を奉

伊加留加耶度美乃乎加波乃太衣波古

曾和加乎保岐美乃美奈波和須礼せ

太子宮に返給て後に、此の人死けり。云

々

とある。

「志太互留耶」は、誤写とみられている。

「今昔物語集」(一)日本古典文学全集、小学館

七三頁注一六参照)

また、聖徳太子伝暦には、次のように述べられている。

「(「公孫氏」参照) なるや」は、(「片」)にかかると枕詞であ

一部重複

擣 2189P
類文 前頁5行へ

宣 1745P

4,130P-1/3

むち 鞭 同(一)

日本書紀 457P
天つぎ 改行
日 大和 703P 己
大和 705P 己 同(一)

ないという。

● 日本往生極樂記では、

7 伊河留賀能 等美乃乎河波能 多延波許

會 和賀於保日 弥能 美奈和須良礼米

とあり、第五句はミナワスラレメである。

(「日本靈異記」日本書典文学大系、岩波書

店、四五七頁参照)

拾遺和歌集卷二十、哀傷には、

「聖徳太子片岡の山辺道人の家に坐しける

に、^{OK}餓えたる人道のほとりにふせり。太子の

乗りたまへる馬とまりてゆかず。ぶち(鞭)

をあげて、打ち給へどしりへりぞきてとど

まる。太子即馬よりおりて、^{OK}餓えたる人のも

とに歩みすすみ給ひて、紫の上の御ぞをぬぎ

てうゑ人の上に覆ひ給ふ。歌をよみて宣はく

しなへるや片岡山にいひに餓えてふせる

旅人哀れおやなに汝れなれりけめやさ

す竹のきぬはやなきいひに餓えてこやせ

る旅人あはれあはれ

といふ歌なり。^{OK}餓人かいらを拾^{OK}げて御返しを

日本書紀 99 34
等美 ④ 4130^{P-1/2} ④ 4128^P
3行 紀下155P

4.130^{P-2/3}

④ 4129^{P-3/2} 11行

奉る。
いかるかやとみのを川の絶えはこそわが
大君のみなを忘れめ
とある。(「日本書紀」日本古典文学大系
岩波書店、四五七〜八頁参照)
いずれも、イカルガノ(ヤ)・ミナヲワス
レメ(ミナハワスレメ・ミナワスラレメ)等
の異同があつて、どれが祖形だったのか定か
でない。
とはいえ、大略、
へ聖徳太子は、黒駒を降りて飢者上語りか
け、紫の御袍を脱いで覆つてやり、歌をもつ
てねぎらゆれた。すると、飢人は頭を挙げ、
「斑鳩には、その名も日等与刀弥々大王」
(豊聰耳法大王)という名にまことにふさわ
しい日等美(富)という小川が流れていま
すか、その日等美の小川の水が絶えてしま
うことかないのと同じように、我が
大王日等与刀弥々大王の御名が忘れられて

しまうことなど、決してないでしよう。
という内容の返歌を作り、お答えした。
という意味なのであろう。
参考までに述べる、日本霊異記上巻第四
話には、――歌われた状況が多少異なっている。
「鵜の富の小川の絶えはこそわか大君の御
名忘れぬ」
「いかるかの富の小川の水が絶えてしまったな
ら大君（聖徳太子）の御名が忘れよう」
と記され、おり、次のように解説されている。
「到底考えられない事を仮定条件にあげて
それに伴う種々のできごとを絶対に起こらない
と強調する千弦の歌であり、上古の歌に多い
という。（『日本霊異記』日本古典文学大系
岩波書店、七九頁注四、同四五八頁注二九参照）
「ところで、古今和歌集」巻七―三四三に、
わか君は千代に八千代に細れ石の
いはほとなりて苔のむすまで
という歌が載せられている。

2字中

$$4.131^P - 1/5$$

小野小町 (2版)
184頁下段

小野小町 (2版) 178' 下段

わが君は 千代よ 千代よ 千代よ 細水石の
 いはほとなりて 苔のむすまで

大
 ところ
 口
 古今和歌集
 卷七
 三
 四
 三



(「広辞苑」へこそ、
いから、大君の御名は
ない)の意が隠されてゐる。
つまり「絶えはこそ」の仮定法は「
水られない」という断定の婉曲表現である。

(「他参照」)

助動詞の已然形

「寛政とこれ」
④ 4131-5/5
⑤ 4132-2/3

たいせき元
相模 堆積岩 1340
久良左 水成岩 1173

4,131^P-2/5 巖 549^P
Sfile 4131^P

江戸時代云 240^P 1600~1867
百科 7-282^P
和漢朗詠集云 237/1 隆達節
今 168^P

「和漢朗詠集」(一〇一三年成立)には第一
句が「君が代」とあり江戸時代(六〇〇~八六七)初期の流行歌
「隆達節」の巻頭第一にも第一句が「君が代」
は「とあって、現行の歌と同じである」
・「小石が成長して大きな岩になった」という中
国の説話を取り入れたものであろう
といわれている。「古今和歌集」日本古典
文学全集、小学館、一六八頁。「世界大百科
辞典」平凡社へ「君が代」。「広辞苑」(参照)
・「積岩」か「水成岩」になるという現象は論外として
「細水石が、巖となる」
・この歌を作った人(読入らるる)も「た
とえその説話を知っていたにせよ」そのま
うなことは全く信じていなかったに違いない
・察するところ、
「到底考えられない事を歌い、――つまり
「細水石の巖となりて苔のむすまで」と詠じ
て、「永遠に」という意味を強調したのであ
ろう」

意味合、力更ら

君は、天皇に限らないという。

4,131-3/5

永久 289

機知

永537

「意味」前
意味合い 永150

次頁
から

と歌ったのときおり、

と歌ったのときおり、と推察される。

となりて苔のあすまで（永遠に）

わが君は千代に八千代に細れ石の巖

莊重に、

そこので、この歌の作者は、機知をまかせ、

いといえよう。

と歌ったのでは、歌としての情緒にやや乏し

「わが君は、千代に八千代に永久に」

なかも、ただ単に、

口永遠に口という意味合いになるわけである

の巖となりて苔のあすまでとは、つまり

三とは絶対無いのだから、細れ石

と思われろ。細れ石（小石）が次第に成長して巨岩になる

補足すると

科学を無視したものだ。と
 いった見解が新聞紙上に掲載される。
 なるほど、一見したところそのような感
 あり、誰もが即座に「
 細小石が巖となる筈がない」と
 と思う。
 ーしかし、本来、この歌の趣旨は、
 表面的な言葉の奥にある、と想到される。
 ② また、「わが君は」の歌に關連して述べる
 と、
 「君は、この歌を贈る相手のことであ
 り、賀の歌では「ば」は用いられた。天皇を
 さすとは限らない」
 という。(「古今和歌集」日本古典文学全集
 小学館、一六八頁、注三四三参照)
 ・つまり、
 「この和歌の「君」は天皇でなく、一般
 的に「あなた」を指し、長寿を祝う歌だとも

ニヒ
言奉や 818
つれ 前 184
言葉で親う
つる 麗
かしく

4,131^P-5/5

古今 続封おん 朝日 H 11.7.8付
168
と補って受る。
343

いゆれ ている L
という。 (「朝日新聞」平成十一年七月八日
付、八日の丸・君が代を考えたよう✓参照)
● ~~と~~ ~~は~~ ~~と~~ ~~え~~ ~~も~~ ~~下~~
「わが君へあなたの生命」は、千代に八千
代に、こまかい石が大きな岩となって、苔が
あすまで、永遠に 続きますように L
という解釈をしてみても、——現代の我々
には、何のことだか、よく分からないで
● 人の寿命は、せいぜい百年くらいのもので
あって、千代に八千代に生き続けられる筈が
ないからである。
● しかし、恐らく、こう——この歌が作
られた当時には、まだ、我国古来の「龍名」
の考え方が根強く残っていた、
「わが君へあなたの家系」および「名」が
次々に受け継がれて、千代に八千代に
細水石が大きな岩となって、苔がむすまで
永遠に 続きますように L
と歌ったものなのであろう。 ~~と~~ ~~思~~ ~~い~~ ~~込~~ ~~め~~ ~~込~~ ~~め~~ ~~る~~。
● すなわち、震わしくも相手を言奉ぎ、
この和歌は、
電「ことばさ」

4,132^P-1/3

① わが君の世か、子々孫々、永遠に続きますように
② わが君の名（名声）か、子々孫々承け継がれて、永遠に続きますように
といった意味なのであろう、と解される。

*

小林 839 小林 930
家 賜 たまはる

紅千 455 法王帝説 → 名 悼歌 1832 (挽歌)
千に 24 解 于 小林 43 より、から

4.132^P - 2/3

かえりうた 返歌 366^P

亀井 235^P 巨勢の三枝大木
藤原 (五) 16^P ⑤ 4187 にも同歌

波書店、四五七頁注二九参照	る。へ「日本霊異記」日本古典文学大系、岩	とあって、法王帝説と同じ歌が掲げられてい	「于時創者蒙賜衣裳并歌」即奉和歌曰「	・なお、「七代記」には、	と思われる。ひと	哀悼歌としたの	く知られていた歌に、少しばかり手を加えて	大夫は、	へ太子がお亡くなりになつた時、巨勢三枝	枝大夫が「伊加留我乃」の歌を作つたという。	と記されていゝる。	曾、和何於保支美乃、彌奈和須良畝米	伊加留我乃、止美能乎何波乃、多畝婆許	上宮(薨)時、巨勢三枝大夫歌、	について、上宮聖徳法王帝説には、	それにして、何と、
---------------	----------------------	----------------------	--------------------	--------------	----------	---------	----------------------	------	---------------------	-----------------------	-----------	-------------------	--------------------	-----------------	------------------	-----------

紀F198

宇治谷下98
井上下144

4.132^{P-3} ④4/28^P

電井207
時聖実記457

ふかい 志1921^P
付会 無理に合わせたこと

や
さす竹の
君はや無き

飯に飢て

皇太子は、そのさまを御覧になつて、水と食
物とを与え、着てゐる衣裳を脱いで、飢えた
着にかけてやり、曰、安らかに寝てゐるのだぞ
といわれた。そして、
一その旅人あはれ、親無しに、汝生りけめ
片岡山に、飯に飢て、臥せる
かたきやま
いふ
え
こや
あけ

皇太子、片岡に遊行でますし
とあり、引きつづいて、こう記されてゐる。
時に、飢えた者が道のほとりに倒れてい

年(六一三)十二月一日条に、

日本書紀もまた例外でなく、推古二十一

とははなはだ困難である。

会脚色が更に多くて、その真相を見極めるに

いかしなから、これ等の記事には後代僧家の附

かえる。

リ、当時広く言い伝えられていた様子がうか

については、実に多くの書にとりあげられてお

このように、聖徳太子の曰片岡山への行幸

568

コクヨ ケー20 20x20

新刊 4120^{P-2} 549

若 4130^{P-2} 12行
若 4132^{P-2} 16行

885

志1921^P そうか とす

己 小林 342^P
大 404^P
紀下 155 注 21

紀下 198. 199^P

4, 133^P - 1/2

人 人
問 問 云 2209^P

と お歌いになられた
という。 (第 468 回 参照)
あるはこの歌は、次のような意味であっ
たらうか。
片岡山で、食物に飢え 倒れてゐる旅人
よ。おまえはかわいそうだ。お前は親無いで
育ったのか、優しい恋人はいるのか。食物
に飢えて倒れてゐる旅人は、私同様に「か
わいそうだ」
心中の飢え(願望)のために悶悶と苦む太子は、
片岡山に飯に飢て臥せる哀れな旅人の姿と
己自身の心とを重ね合わせ、この歌を作ら
たのであろう、と拝察される。
↑↑↑ 参考次に述べると、
① 曰 旅人のことを、日本書紀は曰 多比等
と記載している。
② 天寿国繡帳銘に曰 等巳刀弥々乃弥己等
元興寺露盤銘に曰 等刀弥々乃弥己等
(日本書紀) (下) 日本古典文学大系、岩波書店

・ 頁の上半分に
掲載下さい。



・ 図書館で、とくに調
べてもらっても、カラーは無い。

・ 四天王寺に、『聖徳太子御絵伝』
はあるが、この絵は無い。

著作権許諾不要。

・ 『聖徳太子御絵伝』を
図書館レファレンスコー
ナに依頼して、主人が探
したけれども、見つ
かりませんでした。

・ 申し出た時から、
著作権料を支払うこと
にしたい。

54
13QG

54
14QG

第468図

かたおかやま

片岡山で

飢人に紫袍を与える太子 (『聖徳太子御絵伝』より) ←

『聖徳太子の歴史を読む』上田正昭・千田稔

文英堂、2008年2月22日発行、273頁参照。

四天王寺の
『聖徳太子
御絵伝』には、
掲載されて
いない。

4/35^P

紀下200^P

宇治谷下99^P

紀下199^P

下4/8
4/7

*

日先日道に臥していた飢者は、凡人ではあ
るまい。きつと眞人であろう。と
言われ、使いをやって見させられた。
使者は、帰ってきて、こう言った。
墓所に行ってみましたら、封め埋めたと
ころは動いておりませんでした。そこで開け
て見ましたら、屍は既に無くなっていて、唯
衣服だけが畳んで棺の上に置かれていまし
た。
是に、皇太子は、復使者を墓の所に返して
その衣を取ってこさせられた。そして以前の
ように再びお召しになった。
時の人は、大いに異み、
聖は聖を知るといふか、それは本当なん
だなあ。
といつて、いよいよ惶恐した。
という。

4,136^P

電「ゆき」 4126 2/3 15/1 「ゆうこう」でいい
軽城 石1542? 物中の変へ主成会 軽模の時期

太子の事績、三つの区分

■ 推古二十一年（六一三）十二月一日の片岡
 山遊行（一）丁度この頃、日本の歴史の流れ
 れは、大きな曲がり角にさしかかっていたの
 であらう。

■太子は、馬子と共に、
一段と激しい
情熱を傾け、
日夜寸暇を惜しんで、
国史の
編纂に取り組んでゆかたように推察される

因みに述べると、太子の摂政就任から薨去
 までの三十年間は、業績の上から三つの時期
 に分けられようか。

第一の期は、推古元年から十一年末迄
 日辺日本国に多忙な日々を過ごされた活躍
 の時代。
 第二の期は、十二年正月一日の冠位十二
 階の施行から二十年末頃の金人の夢告
 の時まで
 大王の位を返上して皇太子の地位

ほとん
殆ど 2046

天つぎ
改行

4137^p

にあり、推古天皇の補佐に徹せられた時代
③第三期は二十年末頃から三十年の薨
去迄、日国史編纂に没頭された時代
の三つに分けてみたい。(約十年間)
なお、この最後の期間には、推古紀二十八
年条の「日国史編纂」を除いて、事績らしいもの
は、何一つ記されていない。
■聖徳太子が、歴史から殆んど姿を消された
かのような約十年間の空白期間は、普通に考え
るとき、理解し難く、奇異な感がある。「聖
徳太子」亀井勝一郎、日本ソノサリビスセン
ター、二二頁参照)
■しかしながら、実は太子は、単なる国史の
整理などとは全く違う、――将来の日本国
の基礎となるべき理想の国史の編纂一筋
に邁進して、晩年を過ごされたのであろう。
■そこで、この最後の期間中の太子の事績と
しては、唯一つ最も重要な「国史編纂と
だけ」が記された、と解される。

米

月日 4/14 真相 155 水泡に帰す 1176 4/138 P-1/2 作業 29 大まか 281
 月日 3/29 真相 155 水泡に帰す 1176 4/138 P-1/2 作業 29 大まか 281
 月日 3/29 真相 155 水泡に帰す 1176 4/138 P-1/2 作業 29 大まか 281

国史編纂 記述の仕方の工夫

大まかな話の筋はすでに、最初の構想の段階で出来ていたとはいえ、しかしいざ、実際に書き下してゆくこうするとき、二人は、その作業のあまりの難しさに、改めて驚愕した。
 この「国史編纂」という事業は、当初考えられていた以上に困難を極めた。一言の過ちも許されず、不適切な表現一つによつてさえ、全ての労苦は水泡に帰す。

すなわち、不用意な一字一句によつてさえ、真相が露見するとはもなしかねないのである。
 注意のうえにも、さらに細心の注意を払いつつ、作業を進めてゆかなければならなかった。遅々として捗らず、書いては直し、書いては添削する毎日だった。

時が過ぎ、いよいよ進捗し、いよいよ見えない。

4.13 8^P-2/2

■ それでも、除々にではあったが、^{いよいよ}「^{いんじつ}真実の^{れきし}歴史」は「^{りぞう}理想の^{れきし}歴史」へと、^{すかた}その姿を変えていった。

*

えいじ

H5.5.16 (日)
H9.1.25
H11.10.19
H29.1.9

多々用 1401
多々用 1401
多々用 1401

早谷込 182
早谷込 182
早谷込 182

4.139

字句 956
文字と語句
文飾 1979
諷示 993

四。

一書に曰く

を多用すること。

4142
11行におお

さて、理想の書曰日本国の国史の記述に
当っては、特に次のような点に留意されたい
一。国史としての体裁を保つて、厳しく堂々
と記されるべきである。諸外国に誇示できる
ものであること。
二。中国の史書・その他の古文書に記載され
ている字句を最大限に利用し、巧な文飾を
施すこと。こうして莊重な文体となし、我が
国の真実の歴史の輪郭を暈すこと。
三。原則として真実を述べ、よほどの場合で
ない限り、明らかな虚偽の記述は行なわ
ないこと。
なお、真実を述べるとは、本来の歴史を全編にわ
たって、言葉少なく舌足らななく、の雅拙
な文章によって書き示すにとどめること。
また、国史には事実のことが記されてい
るにもかかわらず、読者が、早谷込に
し、勝手に間違って理解するように、意図
して記述すること。
つまり、国史の執筆者に各科が及ばない
よう、気を配ること。

改行

33.5.29.13

勘定 500 263 2003 4,140 29 27 63 84

・実際の歴史をバラバラに切り離して、幾つもの一書に書き留める方法がある。或は一つの一書に

のみ真実を記載して、他の一書にはやうでない事(すでに伝説化してゐる事等)を後世の人の

目を眩ませる爲に、縷縷と記す方法もある。

五。二つ以上の似たような記事は、無理してで

も一つにまとめて掲載すること。(神功皇后の三

韓征討、仏教伝来その他)後代の結果を早々と載せたり

六。話の前後を逆に述べてたり、本来関係

のない記事同士をくっつけ合わせたりすること

とも可(大國全命の因讓サと数々の試練

雄略天皇の長大な遺詔、等々)

七。曆法上、一巡(六十年)すると再び元の

干支に戻る。一巡の數巡の勘違いは、す

い令注意してゐてさえ往々にして生ずるこ

とであり、この種の過失については編者

の責任と咎められるものではない。

巡・ニ巡等の誤りは、国史全体を暈す為

大いに有効である。特に外国の記事に、こ

の間違ひを意識して多く用ゐること。

ハ。地名説話をふんだんに取り入れて、読者を

惑わせ、本筋を分かりにくくすること。

20

20 20 20 20 20

運新 (1)-408 5

895

20

紀上 270

うやま
ちう 212

28

4.141
織候す
云 335

ちりば
金 1465
随市 1172

397
1553
2207

533
主せ人 249
226
214

九。大倭（九州）と倭（近畿）との双方にある
 類似した地名を大いに活用すること。
 西の方の地形や地名があまりにもよく似て
 いるので、ついうっかり間違えてしまつたとい
 う言ひが成り立つ。良心の呵責を感じ
 る必要はない。決然として筆を進めること。
 十。開聞岳・阿蘇山・雲仙岳の噴火や地鳴り
 また天変地異等のことについて、は、適宜、
 怪しげな文言で表現し、随所に鏤めること
 十一。妖言、童謡、諷刺歌、倒語・古老の話な
 どを綴り交ぜること。
 十二。応神天皇以前の各天皇が、幾度も生まれ
 かへり、長寿を保つたことについて、は、
 詳細な記述を避ける。ただたんに「長命で
 あつた」とのみ記すこと。
 人は、霞の中に見え隠れするようにな
 うとした定かでないものを神秘的に感じて
 崇め敬いたがるので、あえて明確に記さな
 い方がよい。古く遡って神代に近づくと
 寿命が長いといふことは、かえつて自
 然であり、天意として理屈抜きで納得され
 よう。

最大限 4139
789

コト 20

かみの
神代 新や(1)-187 下 187, 4171-1/2 下 187

小方
 334
 大前门 263 314
 天智

十三。崩山という字は、天子の死、つまり「あ
隠水になつたこと」を示す時に用いる。
しかし、倭王（天皇）が退位された場合
であつても、我が国の王朝に乱れが無い
という状況をより鮮明に印象づける爲
崩山の字を用いること。（神功崩、継体崩
欽明崩、敏達崩、用明崩、舒明崩等参照）
十四。天皇と記載しただけでは、一体どの
天皇を指しているのか、分からないわけであ
る。真実を悟られたくない時や、ぼかす時な
ど、読者が解釈間違ひし易いよう随所に用いるこ
と、しかし真実を記すよう配慮すること
と（継体紀二十五年条「日本の天皇及び太子・
皇子、俱に崩薨りましぬ」といへり。崇峻
紀五年条「天皇を弑せまつらむと謀る」等
参照）二朝時代の記述の際や、上皇のこと
を記さなければならぬ時に、有効である
十五。窮したときは、「字」を万葉仮名的に
用いて、その字の意義によって解読者の気
を逸らし、誤解させないように務めること。

4.143^p

玄 2318^f 玄
留元 = 注意 563.6, 3 (金) 玄 1874^p
④ 4139^p 25^p 玄 2363^p
文辞 1978^p 霧呈
文章のこと

十六。以上の他にも、
か数え上げられる戸
工夫をこらし、文辞を練って、決して真実
の歴史が露呈しないよう
と。

＊

文章の作り方
「時」とは「場合」に「応じた」
「時」とは「場合」に「応じた」

17 H5.5.17 (A) 紀小 38
H9.1.25 中世以降・神代巻を重んず

とく 1608
一言一句 122

4,144

言語に絶す 12497
気宇壮大 512
改編 362

こうして太子と馬子とは、わすか一つの文
字にさえ未来を予測した気をつかい、文章の
端々にまでも言い知れない心血を注ぎながら
国史編纂事業を進めていった。
それは、祖先達が築いてきた実際の歴史を
基にしつつも、言語に絶するばかりに
気宇壮大な理想を追求した国史に改編する
大掛りな作業であった。

概略の荒筋だけとは、くに完結している
というものの、いつに大変な秘事であった。
一言一句にも、表向きの意味と真の意
味とを込めねばならず、言いたることか
書けないうまどうこそさがつきました。
この正史の創造が、そんなにたやすく出来
るものではない。

ことに、神々の世界が展開する
神代の巻
に、ついでには、特に入念に見直し、
き改め、さらにもまた修正する、
という

根気の要る

添削
4138
1/2
1949

世界44418

薄墨霞

187
412

562.6.4(四) 4,145P

1811

2022
38

のは4x

も遠くなるほどの工程が繰り返された。

冒頭に置かれるべき神代の巻こそが、この

国史の中で最も筆致極まりないところであ

り、重んぜられるべきなのであった。

神の御世の物語を、筆致の限りを尽して崇

高麗に記すことによつてこそ、

神の子孫である天皇には、その尊い血筋

ゆえに――自ずから日本国を統治するいゆ

水があるのだと

と述べる後編に無理なく、繋がる

なるわけである。

また、人皇の御世へと筆が進んで、真実の

二朝の歴史を、あたかも一朝一かなったか

のように取り繕う為のあの手この手が、縦横に

駆使されていった。

ある時は美しく壮大に、――かしある時は霞

か立ちこめた薄墨色の絵のように、この夢

の世界の記録は形造られていくのだった。

米

湖沼を描き出し

HS.5.8(9)⑥ 擬態 535P
 4,146P
 488P
 330P
 1102P

日本国の威信をかけた国史中に、本来、一字といえども余分なところなど記されるべきでなく、冗長な表現重出なども許さざる筈はなかつたろう。

しかしながら、歴史的事実を簡潔・率直に述べればよいといったものでなく、

へ理想とする国史を描き出し、そして後年の読者全てを意図した通りの解釈へ導く為に、様々な工夫を凝らしながら、書き進んでゆかなければならなかった。

あらゆる世人を―――多少の疑問を抱く輩かいようと―――とあれば一人残らず思惑のとおりに誘導するにはどうしたらよいか。

学者達の目を引き付けて欺く目眩まし、微妙な言葉の絡繰、こいつや文の並べかた、文字の選定、等々、その執筆の苦勞たるやはるか

に想像を超えるものであった。

一方で平然・沈着・尊嚴・理詰めを装う為の多言はいわば止むを得ないこととされて、

7 H.S. 5, 199 (2) 563, 6, 5 (P) (2) ^{いのちが}
 199.1.25 (土) ^{命の限り}

4, 147^P

全金 1267^P ^{幾んど} ^{小林 354^P}
 4138 ^{1/2 期}

千言万語 1262^P ^{幾んど} ^{小林 351^P}
 2380^P

魅惑的な千言万語の口唇に穴や口が、
 全編にわたって、無数に仕掛けられていった。
 書き加えたり削ったり、月日が続き、さら
 に一文字一文字にまでも磨きがかけられてい
 った。
 太子は、全身全霊を傾注して没頭した。
 こうして、幾年かが、瞬くうちに流れ去っ
 ていった。
 いかし、心が急かされるゆりには、その作業
 はもどかしくばかりに屋々として進んでい
 った。
 煩雑きわまりない、いっまで続くか
 分らない、難事業の真只中であって、太子
 の心中には、いつか苦悩の色が濃く広が
 っていた。
 7 このような進捗状況では、この私の生命
 のある限りどんなに務めても、到底、完成はお
 ぼつかない。いつの日にも、事は成就するの
 であらうか。

米